

京浜工業地帯の父

あさの そういちろう
浅野 総一郎 (1848-1930)

浅野セメントほか



『浅野セメント沿革史』

より

§ 人物データファイル

出生

嘉永元年3月10日(1848)、越中国氷見郡藪田村(現・富山県氷見市)に、医師である浅野泰順の長男として生まれる(幼名は泰治郎)。浅野家は豪農で、医者も兼業とする家柄でもあり、村人の尊敬を受けていた。

生い立ち

浅野は、父泰順の当時としては高齢時にできた子で、後継ぎとするには幼いと思われたため、医業は長女が婿を取って継ぎ、5歳で縁続きの医師の家に養子に出される。養家では跡継ぎとして養父母の厳しい教育方針、期待の下で学問を強いられたが身を入れられず、代わりにたくましく働く行商人や商船の出入りに目を奪われる。江戸末期、北前船による海運業で富を築いた豪商銭屋五兵衛にあこがれた。13歳で養父の代診が勤まるほど利発だったが、その養父に褒められることでかえって医業を容易なものとして蔑んでしまう。ついに養家を飛び出す騒動を起こし浅野家に戻る。

実業家以前

実家に戻り、しばらくは穏やかに過ごすものの、姉夫婦が相次いで他界する。父はすでに亡くなっていたことから、幼い弟、甥のふたりと母のみが残された。大望を抱いていた14歳の浅野は、ここで奮起し様々な商売に手を出す。母からの資金で女工を雇入れ、縮織^{ちぢみおり}の帷子^{かたびら}を売り歩く。醤油の醸造もはじめるが、いずれも資金が続かず挫折する。16歳で稲扱きを農家に販売したが、天災により収穫が上がらず、元手の回収ができなくなる。

慶応2年(1866)資産家だったことに心が動き、鎌中惣衛門という有力者の娘婿となり、惣一郎と改名する。ここで義父の許しを得て、農家が副

業で作ったむしろや畳表などを集めて共同販売する産物会社を興す。いったんは配当を出すほど成功するが、物価高騰や天災により破たんし、借金を抱えたため離縁される。その後も店を開き、むしろをはじめ様々な商品を売りますが、扱う品が増えるほど資金が必要となり、借金が日増しに重なる。利益の大半が利息にまわり、損一郎と謗られる。明治4年(1871)23歳のときに、ついに高利貸が実家まで押しかけたため、故郷を抜け出し東京に出た。

数々の失敗を重ねながらも、野心溢れる浅野を支援し、借財の整理などにあたった同郷の有力者山崎善次郎については、氷見市に頌徳碑が建立されている。

実業家時代

これまでは維新期の混乱、農漁村を中心とした不安定な経済環境で商売は空回りするばかりだったが、上京後は次々と成功を収めていく。

最初にたどりついた本郷の下宿屋で主人に勧められ、冷たい砂糖水を湯呑1杯1銭で売る「冷やっこい屋」を始める。季節が変わると、郷里の知り合いを横浜に尋ねて、そこで食物などを包む竹皮を売る店を開く。さらに竹皮の仕入れ先だった千葉の姉ヶ崎で、はるかに需要のある安い薪炭を仕入れ、神奈川県庁に売り込む。貿易の伸長で輸送船が増えれば石炭も商う。発展著しい開化期、開港場横浜にあつて、自然と商売が広がっていく。故郷を出てからここまではほぼ3年。以後しばらくは、下宿屋の屋号と主人の戸籍で行方不明となっていた者の名を借りて「大塚屋」大熊良三を名乗って商売をしている(郷里の債権者を憚った、ともいわれる)。竹皮を商っていた頃、店の近くのよろず屋の娘で働き者と評判のサクと結婚した。

明治8年(1875)横浜に瓦斯局ができると、その製造過程でできるコークス(当時はまだ廃物扱いとなっていた)の処理が問題となった。浅野は官営の深川セメント製造所にいる知人の技師に、コークスの利用法について研究を依頼する。セメントを焼く石炭の代用物として有効なことを確かめると、瓦斯局からコークスを安値で買い取り、セメント製造所に売却した。その評判が伝わって、抄紙会社(のちの王子製紙)は瓦斯局からコー

クスを大量に仕入れる。機械の運転に導入したが、石炭の火力に及ばず大量に持て余してしまい、そこを見計らって浅野は石炭と交換する。この取引をきっかけに、抄紙会社への出入りが始まり、設立者渋沢栄一の知遇を得る。

明治13年（1880）官業の払下げ*が始まると、浅野はそのセメント製造所に着目する。すでに懇意となっていて、官界にも影響力のある渋沢に相談するが、セメントは事業として確立するには尚早といわれる。しかし、その将来性を熱心に訴え口添えを依頼すると、渋沢は遂に折れて工部省に働きかけた。明治16年、無償の貸下げにより工場を任せられると、非効率な官による経営を改め、明治17年（1884）に払下げが認められた。浅野が見通したとおり、皇居の造営、築港、鉄道などセメントの需要は年々高まっていく。工場は明治31年（1898）渋沢のほか安田財閥を率いる安田善次郎の財政的な支援などを得て合資会社浅野セメントとなり、急成長を遂げる（現・太平洋セメントの発祥のひとつ）。なお、払下げから10年目の明治26年に総一郎と改名した。

官業の払下げで浅野は石炭も狙っていた。西南戦争の際、政府が兵員輸送のため、民間の汽船を御用船として徴用した結果、九州からの石炭輸送が途絶、価格が高騰したことがあった。三池炭鉱の払下げは競争が激しく、三井の計略に負けて手を引いたが、今後の工業発展に伴う需要増や、輸送面で有利となる東京近郊での採掘を見込み、明治16年（1883）磐城炭鉱会社を設立した。

また、石炭を輸送する海運業は、日本郵船による独占の弊害がその価格に大きく及んでいたことから、自ら海運会社浅野回漕店を設立する。

しかし、日清戦争後、戦勝国の舞台は海外にあるとして回漕店は売却、外国航路に進出して、海外から利益を得ようと明治29年（1896）東洋汽船を設立する。渋沢に相談すると、当初計画したインド航路は、渋沢が重役となっている日本郵船に割り当てるため、当時、2社に独占されていて参入が困難とされていたサンフランシスコ航路を推薦される。

同年、そのうちの1社、パシフィック・メール社と交渉するため渡米す

る。サンフランシスコでは話がうまく進まず、日本政府の支援があるので船賃を安くし客を奪うと吹聴しながら、ニューヨークに赴き航路参入の交渉をまとめる。そこから汽船購入のためヨーロッパに向かい、イギリスで日本丸、香港丸、亜米利加丸の3船を発注し帰国、明治30年（1897）航海を開始した。その後、日露戦争による御用船としての徴用、他社に対抗して三菱造船所に発注した巨船3隻、天洋丸、地洋丸、春洋丸の莫大な建造費用、戦後の不況などで、東洋汽船はたびたび経営難に陥った。

だが、晩年の大事業となっていく東京湾埋立の構想は、東洋汽船設立の準備で渡航した際の見聞に因っている。ヨーロッパの港湾施設を訪れると、巨大な汽船が岸壁に横づけして、貨車に直接船積みをしている。横浜港の扱う輸出入品は増加しているが、消費地である東京間の輸送ルートは心許ない。東京府・市による東京湾の築港計画は、財政、政治がらみで長年、着工されず、浅瀬の羽田沖で輸送船がたびたび難破していた。

明治43年（1910）浅野が自ら築港計画を立てた出願も、市会では国家的事業に民間人がかかわることは好ましくないとの議論があり認可されなかった。

一方、浅野は東京湾築港の構想に併せて、明治41年（1908）に、工業用地として鶴見・川崎間の海岸沖150万坪の埋立を神奈川県庁に出願する。金融機関の確かな人の連署がないと許可できないとの回答はあったが、安田が実地調査のうえ投資の約束をし、明治45年（1912）匿名組合★組織である鶴見埋立組合（現・東亜建設工業）を設立して出願、大正2年（1913）許可された。

この埋立事業は昭和3年（1928）に完成をみる。その間造成地には、浅野セメント川崎工場、浅野造船所、浅野の娘婿である白石元治郎が経営する日本鋼管など浅野系企業のほか、旭硝子、石川島造船所、芝浦製作所、富士電機などが次々と進出した。また工業用地として機能させるため、電力供給、水道、鉄道などの事業もおこした。

浅野は晩年「我国には百億の富が午睡している」と飽くなき事業欲を語った。その先見性は、後に京浜工業地帯となって、長く日本の経済発展

の基盤となることで実現した。

政治との関わり

田町御殿とも呼ばれた紫雲閣は、10年あまりの工期で、明治42年（1909）東京田町に竣工した純和風の大邸宅。外国からの賓客を国に代わって歓待し、いわゆる国民外交の舞台とすることが、客船を経営する者の国家に対する義務と考えていた。東洋汽船の一等船客は必ず招待したという。

政治家との付き合いは広いが、国家の金を勝手に使うばかりと浅野はいていた。

社会・文化貢献

USスチール（アメリカの鉄鋼会社）を設立したエルバート・H・ゲーリーは、労働、遊戯、勉学を柱に、学校内に工場を置くなど勤労主義に基づく教育システムを確立した。これに共鳴し、大正9年（1920）浅野綜合中学校（現・浅野学園 浅野中学・高等学校、横浜市神奈川区子安台）を設立した。

晩年

昭和5年（1930）欧米に事業巡遊に向かい、寄港先のベルリンで発病し帰国する。食道がんと診断される。大磯の別荘で療養しながら、亡くなる直前まで社員に指示を出し続けた。同年11月9日死去。享年82歳。横浜市鶴見の総持寺に眠る。

関係人物

渋沢栄一 抄紙会社で石炭を水揚げする浅野の働きぶりに渋沢が感心し、面会につながった。学問はなくとも腕で稼ぐことが肝心と教えられ、その言葉を金科玉条とした。

安田善次郎 浅野と同じ富山の出身で、安田財閥の創始者。東洋汽船設



《紫雲閣》 設計顧問に築地本願寺などの作品がある建築家・伊東忠太がかかわる。

立時、浅野セメントを合資組織とする際に財政的な支援を行った。その後も埋立事業への投資など、浅野の事業に対する評価は高く、資金面の後押しで大きな役割を果たした。

エピソード

コークスで利益を上げていた頃、野村靖県令（神奈川県知事）から冗談まじりに自家の廃物（糞尿）の処理を持ちかけられた。浅野はコークス同様大量にあるから廃物利用で利益が出るのだと返答して、県からの借入金で横浜市内に63ヵ所の公衆便所を設置した。汲み取ったものは肥料となるが、下請を申し出る者に任せて年々利益を上げた。浅野は自ら「日本に於ける共同便所の開祖」といつている。

キーワード

官業の払下げ 西南戦争後の財政緊縮政策の一環で、明治13年（1880）「工場払下概則」が制定され官営工場の整理が始まる。当初の厳しい条件は、明治17年（1884）の「概則」撤廃により緩和され、事業経営に意欲的な政商たちが手中にし、後の財閥形成につながった。

匿名組合 江戸時代に起源を持つとされ、明治32年（1899）の商法に規定された会社制度。匿名組合員の出資と営業者による企業経営で、外部に対しては営業者だけが現れ、出資者の名前が出てこないため、許認可が必要な事業でよく使われた。

神奈川との関わり

JR鶴見線には、浅野駅、安善駅（安田善次郎）、大川駅（大川平三郎）、武蔵白石駅（白石元治郎）、扇町駅（浅野家の家紋）とあるように、浅野ゆかりの駅名が付けられている（埋立地の地名にも使われている）。

§ 文献案内

著作

『父の抱負』浅野総一郎著 浅野文庫 1931 〈Yかな、K〉

口述筆記、雑誌のインタビューなどにより、浅野自身がこれまでの歩み、事業に対する所見、感想など直接語った談話をまとめたもの。

社史

『浅野セメント沿革史』 和田壽次郎編輯 浅野セメント 1940

〈Y、Yかな、K〉

第1編工部省時代に、日本におけるセメント工業の歴史や当時のセメント製造法などが詳しく述べられている。

『六十四年の歩み』 中野秀雄著 東洋汽船 1964 〈K〉

東洋汽船の社史。昭和34年（1959）日本油漕船に合併し、社名が失われることを機に編纂したもの。

『東京湾埋立物語』 東亜建設工業 1989 〈Y、K〉

東亜建設工業（鶴見埋立組合の後身）の戦前史を中心とした社史。浅野の伝記部分がコンパクトにまとめられている。

伝記文献

『浅野総一郎』 初版 浅野泰治郎、浅野良三著 浅野文庫 1923

〈未所蔵、Yかなに改訂8版あり〉

本人存命中に、長男と次男を著者に出版した伝記。浅野の伝記の基本となるもので、冒頭には大隈重信をはじめ各界の名士による浅野観が寄稿されている。

『ひもかがみ』 浅野泰治郎著 浅野文庫 1928 〈Y、Yかな〉

浅野糟糠の妻、サクの伝記。長男を著者に浅野家の家庭内の様子なども叙述。

『浅野総一郎伝』 北林惣吉著 千倉書房 1930 〈Y、Yかな〉

秘書であった著者が、前述『浅野総一郎』を読み物的に書き直したもの。

参考文献

『日本の工業化と官業広下げ』 小林正彬著 東洋経済新報社 1977 〈Y、K〉

『日本経営史の基礎知識』 経営史学会編 有斐閣 2004 〈Y〉

〈森谷芳浩〉